

<研究論文>

海外渡航前アサーショントレーニング教材作成の試み

園 田 智 子

要 旨

本研究では、日本人大学生が海外留学、海外研修に行く前に学ぶことのできる異文化間コミュニケーション・トレーニング教材の開発について、教材開発の背景、教材作成の手順、教材の原則と特徴、教材の構成、教材作成時の工夫等についてまとめたものである。この教材は、異文化間コミュニケーションの中でも、アサーティブコミュニケーションに特化したものであり、また、各項目の事例は、研究調査の結果明らかとなった事例を元に作成されている点が特色である。また、単なるケーススタディに留まらず、日英両言語での会話例を示している点も新たな試みであるが、一方で、開発途上の教材であるが故に課題も残されており、今後の課題としてまとめた。

【キーワード】アサーティブコミュニケーション 教材 事例 場面

1. 教材開発の背景

1. 1. 海外渡航前教育

近年、日本の高等教育機関におけるグローバル人材育成の必要性が重視されるようになり、日本人大学生が在学中に海外留学や、海外研修で海外渡航することを大学機関が推奨する傾向が強くなってきている。そういった大学の企画する海外留学・研修前には様々なオリエンテーションや危機管理説明会、事前学習講座などが実施され、学生の安全と事前準備に配慮がなされることが多い。その中で、教育的な側面としての事前学習講座に着目すると、英語会話の練習や渡航先文化の説明などが一般的なものであるが（松田2007）、調べ学習等の事前学習を海外研修の一環として組み入れた事例や、渡航先でのプレゼンテーションのシミュレーションを行うものなど（田辺2016, 山内2015, 又吉2014）多様な形態が見られる。中でも、田中・高濱の一連の研究（田中・高濱, 2008; 高濱・田中, 2009a; 高濱・田中2009b）では、米国の対人関係におけるソーシャルスキルトレーニングを留学前に行い、学習内容の詳細及び効果を実証的に検証しており、トレーニングを受けた交換留学生の自己表現力が向上していったこと、文化理解、対人関係形成への自信や意欲の向上、不安の低下が見られたことを報告している（田中・高濱2008, 高濱・田中2009a）。

1. 2. 日本人学生のアサーション度と葛藤場面

このような中、園田 (2010, 2017) は、日本人学生のコミュニケーションの特色についてアサーション^(注1)の観点からの研究を行った。園田 (2010) では、日米中泰の四か国の大学生のアサーション度を比較し、他の3か国と比較して日本人学生のアサーション度が有意に低いことを明らかにした。また、園田 (2017) では、日本人大学生が海外経験において、どのような文化的葛藤を経験したのか、また、それらの経験には類似性が認められるのかについて、1か月以上の海外滞在経験を有する日本人大学生を対象に自由記述式の質問紙調査を実施した結果、葛藤事例は「パブリック場面における葛藤」「居住場面における葛藤」「アカデミック場面における葛藤」「友人関係における葛藤」「見知らぬ人との交流における葛藤」「異性関係における葛藤」の6つの大カテゴリーと、13の中カテゴリーに分類された。これらのカテゴリーには、積極的な説得交渉のアサーションスキルが必要な場面と、人間関係形成のためのアサーションスキルが必要とされる場面の両方が含まれていた^(注2)。ケースの数が多かったのは説得交渉の場面であったが、滞在期間が長い学生ほど人間関係形成の場面における葛藤事例を経験していることも明らかとなった。しかし、これらの研究を踏まえた、学生にとって有用なアサーションの教材の開発が課題として残されていた。

1. 3. アサーション教材のいろいろ

既刊されているアサーションの教材の中で、特定の対象者に向けたアサーショントレーニングを主題としたものがいくつかある。鈴木 (2014) 『気持ち伝わるコミュニケーション・トレーニング1. 学校編1 (他、友だち編2、家庭編3)』、リサ M. シャープ (2011)、『自尊感情を持たせ きちんと自己主張できる子を育てる アサーション トレーニング40』は、いずれも、子どもを対象としており、イラストやゲーム的な要素を多く取り入れた実践的なトレーニング教材である。鈴木 (2014) では、基本的なコミュニケーション「上手な挨拶」から始まり、子どもにとって葛藤の起こりやすい日常場面をイラストで説明し、その時に行われやすい攻撃的コミュニケーション、非主張的なコミュニケーション、アサーティブなコミュニケーションの例示するなどして、アサーションの概念を自然に学び、アサーティブな表現方法を学べるように工夫されている。また、巻末には練習問題があり、回答例も示されているのも特徴的だ。一方、大人向けのものとしては、看護職を対象とした、勝原 (2003) 『Be アサーティブ現場に活かすトレーニングの実際』がある。この中では、アサーションに関する基本的な知識やアサーション権などの概念の理解、事例検討、ロールプレイの3つのステップでトレーニングが構成されている。特にロールプレイは態度の変容を期待できるものとして、この本を用いて指導するトレーナーへのアドバイスも含まれている。

このように、対象者によって様々なタイプのトレーニング教材があるが、本研究で目指したアサーティブコミュニケーションの教材は、海外渡航経験の少ない大学生向けのものであり、子供向けのもの、専門職向けのものの中間をとる必要があった。つまり、場面の理解にはイラストなどを用いてわかりやすさを追求し、コミュニケーションのトレーニング部分には、ケーススタディを用いてリア

ルな会話を作成する。また、ロールプレイに不慣れな大学生のために、あらかじめセリフを準備したシミュレーションを準備するという方針をとることとした。

2. 教材開発の手順

教材開発は、以下の手順で行われた。

1) 海外渡航場面における異文化間葛藤事例の収集と分析

前述のとおり、園田（2017）では日本人大学生の海外接触場面における6つの大カテゴリーと、13の中カテゴリーとその特徴を明らかにした。

2) 教材全体の構成の検討と葛藤事例の選別

1) で収集され分類された事例の中から、①多くの学生が経験する可能性が高く、汎用性の高い場面（居住場面のうち、ホームステイ場面における葛藤など）、②危機管理面から見て必要性の高い場面（異性関係における葛藤など）の2つを軸に13の場面を選択した。また、想定される国、会話の行われている場所が重複しないよう、多様な国や場面を取り上げることにした。

3) 課ごとの具体的内容の検討と執筆

各課の場面が決定した後、具体的に求められるアサーションのスキル、登場人物、会話の流れを検討した。登場人物は完全に架空の人物とし、会話の流れは、園田（2017）において収集された日本人学生の経験した事例を参照しながら、似た事例の一部を組み合わせるなどして架空事例を作った。さらに、事例の内容がわかりにくくないか、海外で経験しそうな場面となっているかについて、長期、短期で海外渡航経験の豊富な日本人大学生1名に、随時確認・助言してもらった。

4) 各課の模擬会話の英訳

最後に各課の最終ステップとして英語と日本語併記のモデル会話を掲載した。このモデル会話は、各課のSTEP1で示された場面において、アサーティブに会話を行った時の一例を示したものである。この会話の作成には、前出の日本人大学生1名の協力を得て、できるだけ日本人大学生にとって自然な表現を使い、難解な英語表現を避け、なおかつ、アサーティブなコミュニケーションを通して葛藤場面に正面から向き合うコミュニケーションになるよう努めた。

5) 挿入イラストの作成

各課のテキスト部分が定まった後、各課に挿入するイラストの作成を行った。イラストは4コマの漫画によって葛藤場面を描写するもので、事例の理解と、問題の把握を容易にするために挿入された。イラストの描画は外部委託し、国別の事情、場面や人物、描かれる背景や外国人の見た目などの詳細をイラスト担当者で随時協議しながら進めた。

6) テキスト前書きの執筆

アサーティブコミュニケーションを学ぶ際には、アサーティブコミュニケーションとは何か、どのようなメリットがあるのか、どのようにすればいいのかなどアサーティブコミュニケーション自体

を十分に理解しておく必要があるため、1課から13課までの具体的場面をもとにした教材部分とは別に、前書きとしてアサーションの基礎的な知識を学ぶ部分を、先行文献や先行研究、及び筆者のこれまでの教育実践をもとに執筆した。

3. 教材の原則と特徴

本教材は、以下の4つの点を原則として作成された。

3. 1. 模擬事例の活用

一つ目は、まず、具体的な事例を生かした模擬事例を活用することである。今回参考にした事例は、園田(2017)の調査で集められたデータをもとにしているが、プライバシーの問題もあり、そのままの事例を用いることはできない。そこで、いくつかの似通った事例を集め、模擬事例を作成し、事例のリアリティーを持たせることとした。

3. 2. モジュール式とステップの積み上げによるスキル学習

二つ目には、一つ一つのケースが独立した学習となるようにしたことである。すべてのケーススタディは、連続して学ぶこともできれば、海外短期研修に頻繁に起こりそうな事例のみを取り上げるといった使い方もできる。また、単に読み物として事例を読む、あるいは、最後のアサーションの会話例のみを学ぶといった利用者のニーズに応じた使い方ができるように工夫した。

3. 3. 具体的コミュニケーションの例示

アサーティブコミュニケーションを学ぶ教材の多くが、実践的なトレーニングの方法として、ロールプレイング法を用いている。ロールプレイング法によるアサーティブコミュニケーショントレーニングには、事例と似た経験を持っている人には内省の機会に、未経験の人にはシミュレーションとして大変有効なトレーニング方法となる。本教材でも、教材のステップ1の事例を読み、その場面を用いて、ロールプレイを行うという練習をすることもできる。そのうえで、本教材では、ステップ4として、アサーティブな表現を組み入れた模擬会話を日本語、英語の両言語で掲載した。これは、筆者の教育実践の中で、アサーティブコミュニケーションにまだ不慣れで、ロールプレイ未経験者の大学生にとって、英語ではもちろんのこと、日本語でもロールプレイングを行うことが難しいケースがあり、より易しい方法を検討したためである。この模擬会話例の中で、アサーティブに会話するということは、どういうことなのか、相手にどこまで言ってもいいのか、あるいは、どこまで言わないといけないのか、どのように言えば良いのかを非常に具体的に会話例で学んでもらうことができる。ステップ3の後に会話例を学ぶ、ステップ3の後にロールプレイを一度やってみてから、お手本としての会話例を練習するなど様々な利用方法が考えられる。

3. 4. 日本人学生への馴染みやすさへの配慮

日頃、アサーティブコミュニケーションとは逆ともいえる察しの文化に親しみ、直接的な表現を避けてきた日本人にとって、アサーティブコミュニケーションは、初め、非常になじみにくく、ハードルの高いコミュニケーションに感じることもある。そこで、本教材では、「何か自分の意見を言ったり、あいてのミスを指摘したりする前にまず、相手への感謝の言葉を述べる」というスキルや、「断る際に、代替え案を提案する」といったスキルなど、相手への配慮を盛り込んだ表現を組み込むよう工夫した。

4. 教材の構成

教材は、具体的場面を取り扱う13の課とアサーションの基本的な概念を学ぶ前書き部分で構成されている。各課は独立した場面と内容になっており、モジュール的に必要な場面を選んで取り扱うことができる。また、場面は、短期の海外渡航場面、中長期の留学場面、その両方で使えるものを取り上げています。さらに、欧米諸国だけでなく、アジアの国々への具体的渡航場面も取り扱った。

各課の内容は、STEP 1 から STEP 4 に別れており、STEP を順を追って進むこともできるが、たとえばSTEP4のみを学習することもできる。

<STEP 1 > 具体的場面の提示

ここでは、海外場面で葛藤が起こっている場面を4コマのイラストとともに紹介し、場面に対する理解と、海外事情に関する理解を深める。

<STEP 2 > 葛藤場面における対処行動の選択

ここでは、STEP1のような場面が自分に起こったと仮定して、選択肢の中から、自分がとりそうな行動を選択してもらう。それによって、ケースへ感情移入し、自分自身のコミュニケーションパターンを振り返る。

<STEP 3 > DESC 法によるアサーティブコミュニケーション表現の練習

DESC 法は、Bower & Bower (1976) の提案したアサーティブなコミュニケーションを行おうとするときに用いることができる台詞作りの4つのステップの英語の頭文字をとったものであるが、本教材では、この DESC 法を用いた台詞作りをトレーニングの中核とした。筆者の教育実践の中でアサーティブコミュニケーションに関して学ぶと、学生の多くが、言いたいことを伝えたいという気持ちはあっても、具体的にどう言えば良いのかわからないと訴えており、まず、具体的な型を用いて練習することが重要だと考えたためである。

<STEP 4 > 日本語と英語の模擬会話による会話練習

最後のステップは、STEP1を想定したアサーティブコミュニケーションの模擬会話で、日本語、英語両言語で記載されている。会話は、できるだけ自然で、なおかつ、自分の言いたいこと、言うべきことが伝えられている会話となっている。一部には、相手への直接的でかなり強い表現を用いたも

のもあるが、大半の事例では、日本人学生が口にし易く、心理的負担が少ないと思われる表現を選んでいる。

なお、各課がどのような場面を取り扱っているか、どのようなアサーションのスキルを学ぶことができるかを表1にまとめた。

このうち、第2課、第5課、第6課、第7課、第10課は、類似の事例件数が多かったものである。アサーションのスキルを見ていくと、大きく「はっきりと断る・相手との人間関係に配慮しながら断る」「相手にして欲しいことを伝える・自分の希望を伝える」「自分の権利を主張する」の3つに該当するスキルを取り上げている。また、それらのスキルを説得交渉、人間関係形成の2つの視点から見ると、説得交渉スキルは5つ、関係形成スキルが8つとなっている。さらに、公的場面と私的場面では公的な場面が5つ、8つが私的場面であった。

表1 教材内容構成

課・タイトル	場面・登場人物	主なアサーションスキル
第1課 空港で～予約が確認できない?!	空港のカウンター搭乗手続き 日本人大学生/空港職員	・相手のミス指摘する・自分の権利を主張する (公的場面・説得交渉スキル)
第2課 ホームステイ先で～こんなに食べきれないよ・・	ホームステイでの食事場面 ホストマザー/日本人大学生	・感謝の気持ちを述べる・相手にして欲しいことを明確に伝える (私的場面・関係形成スキル)
第3課 レストランで～こんなもの注文していないよ!	レストランでの注文場面 日本人大学生/ウェイター	・相手のミス指摘する・自分の権利を主張する (公的場面・説得交渉スキル)
第4課 店頭で～こんなもの買わされたかった	商店での買い物場面 日本人大学生/店員	・はっきりと断る (公的場面・説得交渉スキル)
第5課 大学寮で～なんで私が洗わなきゃいけないの?	大学寮での友人との会話場面 日本人大学生/現地学生	・相手にしてほしいことを明確に伝える (私的場面・関係形成スキル)
第6課 シェアハウスで～今何時だと思っているの?	同室の友人との会話場面 日本人大学生/現地学生	・自分の気持ちを伝える・相手にして欲しいことを明確に伝える (私的場面・関係形成スキル)
第7課 語学学校で～もう、クラス変えてもらいたい・・。	語学学校での会話場面 日本人大学生/現地教員	・自分の状況を客観的に伝える ・自分の希望を明確に伝える (公的場面・説得交渉スキル)
第8課 友人との飲み会で～お酒弱いんだけどな・・	大学寮での会話 日本人大学生/現地大学生	・相手との人間関係に配慮しながら断る (私的場面・関係形成スキル)
第9課 友人との待ち合わせ～なんてルーズな人なの!!	街中での待ち合わせ場面 日本人大学生/留学生	・自分の気持ちを伝える・相手にして欲しくないことを明確に伝える (私的場面・関係形成スキル)
第10課 現地学生との市内観光～疲れているんだけど・・	大学食堂での場面 日本人大学生/現地大学生	・相手との人間関係に配慮しながら断る ・代替案を提案する (私的場面・関係形成スキル)
第11課 現地の警察で～証明書がないと困るのに・・	現地警察署での場面 日本人大学生/現地警察官	・相手の態度に関係なく自分の権利を主張する (公的場面・説得交渉スキル) ・粘り強く何度も交渉する
第12課 クラスメイトから告白された～わたしはあまり・・	海外旅行の場で 日本人学生/外国人学生	・明確に断る (私的場面・関係形成スキル)
第13課 友人との旅行～私があわせてあげているのに・	友人との交友場面で 日本人学生/現地大学生	・自己開示して自分の思いや考えを率直に伝える ・人間関係を修復する (私的場面・関係形成スキル)

5. 教材の限界と課題

最後に、この教材の限界と今後の課題について述べる。

5. 1. 限られた事例

実際に海外渡航する際に、大学生が遭遇する異文化間葛藤事例は、学生の数だけ存在すると言っても過言ではない。しかしながら、教材の特性上、今回取り上げることができた事例の数は13と限られている。また、場面は欧米諸国での事例をもとにしたもの、アジア諸国の事例をもとにしたものなど、様々な文化的背景のものを盛り込んだため、ある特定の文化特有のコミュニケーションの問題点を克服できる教材とはなっていない。その点については留意して用いるべきだろう。

5. 2. 英文例の功罪

この教材の一つの特徴として、STEP4で模擬会話を学ぶことができる点をあげたが、この文例の掲載については、メリット、デメリットの両方が考えられる。メリットとしては、アサーティブコミュニケーションを学び初めた初心者にとって、アサーティブコミュニケーションとはどのようなものなのか、どこまで相手に言ってもいいのか、どこまで言わないと伝わらないかが理解されやすく、会話例を練習するだけでも、アサーティブなコミュニケーションに対する自信ができ、シミュレーション練習となる点があげられる。また、この教材を用いる指導者側にとっても、一つの模範例を示すことで、曖昧になりがちなコミュニケーション練習の着地点が明確になり、指導しやすいという利点もある。一方で、模擬事例があることで、学習者自身が、自分らしいアサーティブなコミュニケーションを考える際に影響を与えてしまう恐れがある。また、本来、アサーティブコミュニケーションは決まった型や文型があるわけではなく、その場、その時に最もふさわしい表現を自ら考えるべきコミュニケーションである。しかし、模範文例を載せることで、一つの型があるように誤解されるデメリットもある。いずれも、指導者は、模範文例を、あくまでアサーティブコミュニケーションを練習するための一つの例に過ぎないこと、このようなコミュニケーションをとったとしても、文例のように相手が納得しないことや、コミュニケーションが成功しないことも十分にあり得ることを学習者に知らせる必要があるだろう。

3) 教材の効果の検証

また、この教材を実際に用いて、実際の日本人大学生にアサーティブコミュニケーショントレーニングを実施したときの効果についても実証的なデータをとって検討する必要がある。海外留学を予定している日本人学生に対する実際の試用と、その効果の検討が今後の課題である。

<注>

1) 「アサーション (Assertion)」について、平木 (1993) は、「自分の気持ち・考え・信念などが正直に、率直にその

場にふさわしい方法で表現される。そして、相手が同じように発言することを推奨しようとする態度」であるとしており、攻撃的 (Aggressive) でもなく、非主張的 (Non-Assertive) でもない、アサーティブなコミュニケーション能力を身につけることによって、気持ちのいい人間関係が築けるとしている。

- 2) 玉瀬ら (2001) の作成した「青年用アサーション尺度」は、既存のアサーション尺度112項目の中から27項目を選択し、大学生に対して予備調査を実施し、修正、再調査を繰り返して、その結果、信頼性、妥当性のある2因子16項目の尺度が作られた。一つ目の因子は「関係形成因子」であり、人とのよい関係を形成することに係わる項目である。2因子目は、「説得交渉因子」で、何らかの葛藤場面で、相手に対し説得や交渉を行うことにかかわる因子である。玉瀬ら (2001) では、この2つの因子について、一般的に人間関係形成が行われた後、説得交渉が行われることが考えられると述べている。

<付記/謝辞>

本研究は、平成24—26年度科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「異文化間葛藤場面におけるコミュニケーション・トレーニングの教材開発に関する研究」(課題番号24520567/研究代表者:園田智子)の助成のもとで行われた。また、教材の作成、英文訳の作成に協力して下さった研究支援者の山崎誠弘氏に深く感謝申し上げます。

<参考文献>

- 稲葉みどり (2015) 「米国短期研修プログラムの教育的効果の考察—現地での活動の省察レポートの分析を通じて—」『教養と教育』15, 7—16.
- 勝原裕美子 (2003) 『Be アサーティブ! 現場に活かすトレーニングの実践』医学書院.
- 鈴木教夫 (2014) 『気持ち伝わるコミュニケーション アサーション・トレーニング1 学校編』汐文社.
- 園田智子 (2017) 「日本人大学生の海外経験における異文化間葛藤事例に関する研究—自由記述式質問紙調査の結果から—」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第16号, 1—11.
- 園田智子 (2014) 「日本人大学生と海外大学生のアサーション度に関する調査研究」『異文化間教育』20号, 128-137.
- 園田智子 (2010) 「異文化間コミュニケーション場面におけるコンフリクト事例とアサーション—関連文献からの示唆—」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第13号, 1—13.
- 高濱愛・田中共子 (2009b) 「在米日本人留学生による滞米中のソーシャル・スキル利用—留学前ソーシャル・スキル学習の受講者 vs 非受講者の場合—」『留学生交流・指導研究』Volume11.
- 高濱愛・田中共子 (2009a) 「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習セッションの試み—対人関係の開始に焦点を当てて—」『留学生教育』第14号.
- 田中共子・高濱愛 (2008) 「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャルスキル学習: 大学での学習場面への対応を課題とした中級セッションの記録」『岡山大学文学部紀要』第49号.
- 田辺記子 (2016) 「高等学校の海外研修・ケーススタディにおける事前・事後学習のあり方—立命館守山高等学校ピース・スタディツアーを事例に—」『立命館教職教育研究』5号, 43—52.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001) 「青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」『奈良教育大学紀要』第50巻第1号, 221-231.
- 平木典子 (1993) 『アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために—』日本・精神技術研究所.
- 又吉斎 (2014) 「英語力向上と ICT 活用を図る海外研修事前プログラムのカリキュラム開発」『日本教育情報学会第30回大会予稿集』182—183.
- 山内ひさ子 (2015) 「短期海外研修の効果を上げるための取組—長崎県立大学国際情報学部国際交流学科の場合—」ウェブマガジン『留学交流』vol. 49.1-11.
- リサ M. シャープ (2011) 『自尊感情を持たせ、きちんと自己主張できる子を育てる アサーショントレーニング40—先生と子どもと親のためのワークブッカー—』黎明書房.
- Bower, S.A.& Bower, G.H. (1976). *Asserting yourself: A practical guide for positive change*, Addison-Wesley.

An attempt to develop assertion training materials on overseas study for Japanese students

SONODA Tomoko

This research, discusses several facets of teaching materials, including their development, background, procedure of preparation, principles and features and content. It also reviews aspects of composition and ingenuity at the time they are created.

This teaching material specializes in assertive communication in the general field of cross-cultural communication, and each item is characterized by being created based on actual examples, which became evident as a result of research investigation .

In addition, this is a new attempt to show not only a case study but also an example of conversation involving both Japanese and English languages. This study also summarizes the problems that persist in the course of developing these teaching materials.